

稲種子生産
ほ場周辺の
農家の皆様へ

優良種子生産のため

イネばか苗病の撲滅にご協力をお願いします!!

良質米を安定生産するためには、優良種子の安定供給が重要です。優良種子を生産するために、イネばか苗病対策に対するご理解とご協力をお願いいたします。

1 イネばか苗病とは?

イネばか苗病はカビの一種が引き起こす病害であり、**種子を介して伝染**します。

多発ほ場から周辺100mの範囲までは孢子による感染リスクが高くなります!



種子の保管や育苗時において、稲わらやもみから等から感染

感染種子の利用により、病気が拡大

2 県内における発生状況

県内における発生は増加傾向であり、平成24年以降、多い年には調査ほ場の約2割で発生が確認されています(図1)。一方、化学合成農薬による種子消毒が行われたほ場では、発生は確認されませんでした(図2)。

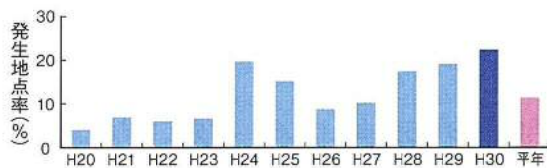


図1 本田におけるばか苗病発生地点率の年次推移
※調査時期：6月中旬～下旬
※平年：過去10か年平均

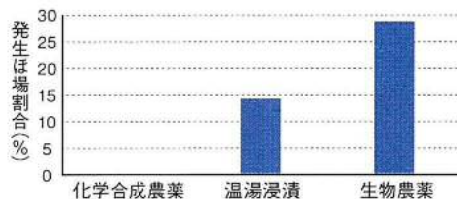
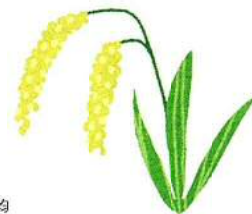
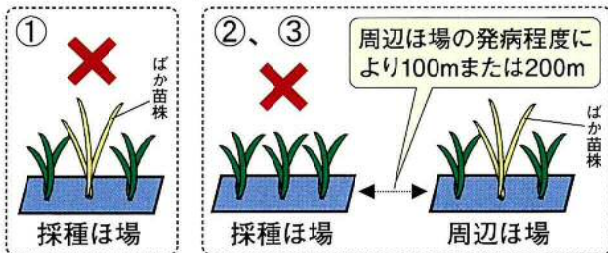


図2 本田における種子消毒方法別ばか苗病発生状況
※直近5か年(H26～30)における6月中旬～下旬の発生状況の平均
(宮城県病害虫防除所)



3 安全な種子を供給するための取り組み

種子からのイネばか苗病の伝染を防ぐため、下記①～③のほ場での採種を行わないこととしています。



- ① 採種ほ場でイネばか苗病が発生した
 - ② 100m範囲内の周辺ほ場でイネばか苗病が発生した
 - ③ 200m範囲内の周辺ほ場でイネばか苗病が多発した
- ※ただし、採種ほ場の出穂前に発病株を抜き取りした場合、採種が可能です



周辺農家の皆様へ ～優良種子生産のため、ご協力をお願いいたします～

- ✓ **イネばか苗病を出さないための栽培管理の徹底** (詳しくは裏面をご覧ください)
- ✓ **採種組合やJAが実施する取り組みへの協力**
 - ・採種ほ周辺ほ場の育苗時や本田生育時におけるイネばか苗病発生状況の見回り
 - ・採種ほ周辺ほ場で確認されたイネばか苗病株の抜き取り など



4 イネばか苗病の発生を防ぐための技術対策

イネばか苗病は、**発生してからの対策はありません**。

毎年発生してしまう場合は、以下の点検項目を☑チェックして、再発防止に努めましょう!!

技術対策		確認事項	点検
1	種子の準備	種子更新 ○種子は更新しましたか? →自家採種は、ばか苗病の保菌リスクが高まります。	<input type="checkbox"/>
2		塩水選 ○適正な比重(うるち1.13、もち1.08)で塩水選を実施しましたか? →塩水選により、健全で充実した種子が選別できます。	<input type="checkbox"/>

☑重要!
種子消毒方法の選択

化学合成農薬の利用や温湯浸漬と生物農薬との併用など、できるだけ防除効果の高い消毒方法を選択しましょう!

1 化学合成農薬による防除

または

2 生物農薬と温湯浸漬による体系防除

化学合成農薬は防除効果が最も高く、安定した効果があります。

化学合成農薬の利用が難しい場合は、温湯浸漬と生物農薬による防除を組み合わせることで、高い防除効果が得られます(図3)。

図3 育苗期と本田期におけるばか苗病防除効果の比較

処理	育苗期の防除値(%)	本田期(7/2)の防除値(%)
温湯浸漬	~75	~65
エコホープDJ	~85	~75
タフプロク	~85	~75
エコホープDJ+	~95	~85
温湯浸漬+	~95	~85
タフプロク+	~95	~85
エミガードC	~95	~85

3 温湯浸漬による防除

下記のポイントをしっかりと守り、温湯浸漬による効果を高めましょう。

項目	確認事項	点検
処理量	○袋詰め量は網袋の1/2にしましたか? →詰め過ぎると、急激に湯温が低下したり、中心部の温度が上昇しにくくなります。	<input type="checkbox"/>
	○1回当たりの処理量は適量ですか? →処理量は、取扱説明書等で確認して下さい。	<input type="checkbox"/>
浸漬	○浸漬直後に網袋を2~3回揺すっていますか? →揺することにより中心部の温度が素早く上昇します。	<input type="checkbox"/>
	○浸漬中は処理槽に蓋をするなど、保温対策に努めていますか?	<input type="checkbox"/>
温度・時間	○浸漬温度・時間は、63°C5分または60°C10分としていますか? →浸漬時間が短かすぎたり、浸漬温度が低すぎたりすると防除効果が低下します。また、浸漬時間が長すぎたり、浸漬温度が高すぎたりすると発芽率に影響します。特に「もち」は熱に弱いので、60°C10分で実施して下さい。	<input type="checkbox"/>

技術対策		確認事項	点検
4	種子保管時の再汚染防止	清掃 ○保管前に清掃を行い、保管場所を清潔に保っていますか? →稲わらやもみガラ、米ぬか等、前年の残渣は重要な伝染源となります。	<input type="checkbox"/>
5		保管 ○種子水分を15%以下に乾燥させましたか? →乾燥が不十分だと、ばか苗病菌の増殖リスクが高まります。	<input type="checkbox"/>
6	浸種、催芽、出芽時の再汚染防止	清掃 ○作業前に清掃を行い、作業場内を清潔に保っていますか? →稲わらやもみガラ、米ぬか等、前年の残渣は重要な伝染源となります。	<input type="checkbox"/>
7		管理 ○浸種や催芽は、適切な温度で実施していますか? →適切な浸種温度は10~15°C※、催芽温度は30°Cです。 ※温度が高いと発病が起こりやすくなります。できるだけ低めの温度で浸種を行いましょう。	<input type="checkbox"/>
8		○加温出芽を実施していますか? →無加温より加温出芽での発生が少ないとされています。	<input type="checkbox"/>

イネばか苗病の発生を防ぎ、優良種子の安定生産につなげましょう!